

B-16 ドライクリーニングの洗浄試験における人工汚染布の検討
東京学芸大 岩崎芽枝

目的 ドライクリーニングの洗浄試験に使用する人工汚染布について検討するため、まず、水洗浄に用いられている人工汚染布のドライクリーニングにおける洗浄性を示さねばならぬ。

方法 日本油化学協会法(湿式)、永井氏法(湿式)、樹川氏法(乾式)などの方法により、毛・アクリルの人工汚染布を作製し、これらの人工汚染布と、天然汚垢布とを、次の条件で洗浄した。溶剤：パークロルエチレン、エロゾールOT(以下A-OTと略記)の濃度：0~4%、水分：A-OT1%添加したものに對して0~0.5%、洗浄方法：恒温振とう機を用い、35℃、30分、振とう数110回/分。また、水-SDSの系についても同様の実験を行なった。

結果 (1) 湿式汚染したものは、よごれ成分の如何にかかわらず、同じ繊維では、同じ傾向の洗浄性を示した。即ち、毛では洗浄効率A-OT0.5%添加で極小値を示し、水分0.1~0.2%添加の場合低い。アクリルでは洗浄効率はA-OT1%で極大値を示し、水分添加により低下する。(2) 乾式汚染したものは、一般に洗浄性が悪く、A-OT、水分添加の影響は明らかでないが、毛ではA-OT2%添加の洗浄効率が低い。(3) 天然汚垢布はバラツキが大きく、人工汚染布との対応が確認できなかった。(4) SDSによる水洗浄では、洗浄効率はドライクリーニングとほぼ同程度であった。何れの汚染布もSDS0.2%以上で洗浄効率が高くなり、湿式汚染布では0.3%が極大となった。